

はしがき

- ① 本書は『女流日記』の各作品のうち、入試出題度数が高い有名文を精選し、これに設問を付けたもので、能率的・効果的に読解力をつける。
- ② 各作品の冒頭には、内容を概観するための解説をおき、各章段には、その章段の【解説】を付けた。脚注には、「語注」のほか、古典学習の基礎となる古典語習得の便をはかつて、【重要語句】を挙げた。
- ③ 設問は、できるだけ多角的に取り上げ、一通りの古典学習の力を付け得るように配慮した。また、設問を〔研究A〕と〔研究B〕に分け、おおむねAには基礎的な問いを、Bには発展させた問いを収めた。
- ④ 総合的に女流日記文学を取り扱った教科書や参考書はきわめて少なく、学習上種々不便があると思われるが、本書の活用により、大いに効果をあげることがを期待したい。

女流日記 目次

解 説

蜻蛉日記

- 一、かくて十月になりぬ……………三
- 二、二十五・六日のほどに……………六
- 三、つとめては、ものすべきこと……………八
- 四、また人の文どもあるを見れば……………一〇
- 五、昼つかた、わたらせ給ふべし……………二
- 六、ながつきのつごもり……………二四

和泉式部日記

- 一、夢よりもはかなき……………七
- 二、風の音、木の葉ののこり……………九
- 三、かくて、つごもりがたにぞ……………二

紫式部日記

- 一、十月十余日まで……………二四
- 二、おそろしかるべき夜の……………二六
- 三、御前の池に、水鳥どもの……………二八

更級日記

- 一、あづまぢの道のはてよりも……………三
- 二、継母なりし人は……………三三

三、花の咲き散るをりごと	三
四、七月十三日に下る	三
五、その後は、なにとなく	四〇
六、上達部・殿上人などに	四〇
讀岐典侍日記	
一、明けがたになりぬるに	四一
二、かく言ふほどに十月になりぬ	四一
三、つとめて、起きて見れば	四〇
四、明けぬれば、いつしかと起きて	三九
建礼門院右京大夫集	
一、またの年の春ぞ、まことに	三九
二、女院、大原におはしますと	三九
三、つくづくとおこなひて	三〇
四、建仁三年のとし、霜月	三二
十六夜日記	
一、栗田口といふ所よりぞ	三六
二、うづぎのはじめつかた	三六
問はず語り	
一、今日などは、心地もすこし	三六
二、すでにとおぼゆるに、起こせ	三七
作品・作者解説	三七

## 解 説

「女流日記」を学習するに当たって、とくに留意しておかなければならないことを略説する。本書に収録した各日記の内容や作者については、すでに古典や文学史の教科書で学習しているであろうし、本書の各「日記」の冒頭、および巻末にも一応解説しておいたので、ここでの説明は省略する。

## 一、日記と日記文學

今日、我々は、「日記」を毎日の日付のついた事実および精神内容の記録と考えがちであるが、かつてはそうではなく、男性が漢文を用いて政治上の重要事を記した日曆であり、教養の書であった。やがてそれは随筆・紀行的内容までも含んだけれども、いずれにしても日付には重きをおかない、事実の記録という意味であったのである。その意味での日記として著名なものに、藤原道長『御堂関白記』、藤原定家『明月記』、九条兼実『玉葉』などがあり、今日まで残されている日記の数も多い。

古今集の歌人紀貫之も、官人世界にあってそうした漢文体日記を書く習慣を身につけていたにちがいない。その貫之が、土佐守の任終えて帰京する道中を記録したのが『土佐日記』であるが、その中に、任地で失った愛児への追懐を心ゆくまで書き留めるため、漢文を離れたかな文字で、しかも「女もしてみんとするなり」と自己を女性に仮託して執筆したのである。これが先駆となつてへ女流—かな文字—自己内省の記録という、「女流日記」の一つの型ができたのであり、この傾向を質・量共に豊かに育てたのが右大将道綱母の『蜻蛉日記』であった。これがいわゆる「女流日記文學」である。すなわち「日記文學」は、随筆や一部の評論文學などと並んで、自己を内省的に観照するものであり、この点からこのような文學形態を、ひろく自照文學ともいう。

## 二、日記文学の特質

こうして成立した「日記文学」の特質について、学習の便宜のために、ここにまとめておこう。

イ 個人の自我意識の高まりによる自己告白の文学である。それは抒情文学と同じように主観の表現ではあるが、抒情文学が感情の直接的表出であるのに対し、日記文学は内省的批判的な点に差が認められる。

ロ 日常の生活意識に根ざした、写実的性格をもっている。叙事文学が客観的事件の描写をめざす点では類同性をもつともいえるが、日記文学は、一切の虚構を排し、日常の事実を描き出す点では明らかに相違点を有している。しかも日記文学は、内面の世界、心情の世界を重んずる点では抒情性を濃厚にしているといえる。

ハ 一般に緊密な構成をとらず、表現もありのままを伝える率直な自由さを有している。

## 三、日記文学読解の要点

日記文学の読解に当たっては、その作品の内容・特色を知っておかねばならないことは言うまでもないが、まず第一には、登場人物を整理し、作者との関係を把握すること。そしていかなる事件・心理が書き表されているかを明確につかむ。その場合、日記には和歌が挿入されていることが多く、普通にはその和歌が場面の中心になっているから、和歌の読解と鑑賞が大切なポイントになる。その和歌の読解では、まず和歌の作者を判定すること。しかも日記の中の和歌は、贈答形式のものが多いので、二首を一組として比較・対照して意味を考えること。次に、歌の表面的意味は自然現象を詠じながら、裏に作者の心理がこめられているということが多いから、この表裏二様の意味を明確につかむことが肝要である。

さらに日記中には、紀行の部分も多い。その場合、どこからどこへ、何のための旅であるかなどを明瞭に確認すること。その自然描写の中に、作者のその時の心情が投影されていることが多いから、表現意図を考える必要がある。

## 蜻蛉日記

天曆八年(五五)、当時二十六歳であった藤原兼家が作者のもとに通いはじめた時に筆を起し、一子道綱をもうけ、その道綱が、天延二年(五五)に賀茂の臨時祭舞人に召されるに至るまでの二十一年間の、夫兼家との交渉を中心に、自己の生活を描いた記録である。作者は夫兼家を愛したが、兼家には時姫(道長らの母)の外に、数人の妻があった。作者は夫の愛を独占しようとして得られず、尼になろうとして果たさず、夫を恨み、嫉妬に苦しみ、最後には寂しいあきらめの中に道綱の成長を見守るに至る。そうした繊細な感情と静寂な自然観照とを、しめやかな筆致で描き、平安時代の社会で女性が免れることのできなかつた運命的な悩みを、赤裸々に告白したところに特色があるといえよう。

## 一 かくて十月になりぬ

かくて十月になりぬ。ここに物忌みなるほどを、心もとなげに言ひつつ、嘆きつつ返す衣の露けきにいと空さへ時雨添ふらむ

返し、いと古めきたり。

## 読解のポイント

- (1) 内容は、次の二点に中心を置く。  
イ 夫兼家の不実を嘆く妻の苦悩を描く。  
ロ 一子道綱への母としての愛情を描く。
- (2) 心理描写と写実性にすぐれている。
- (3) その鋭い心理分析は、『源氏物語』に大きな影響を与えた。
- (4) 女流日記の最初である。

【解説】天曆八年(五五)十月。作者が藤原兼家と結婚したのは、この年の秋であった。兼家二十六歳、作者十九歳ぐらゐ。

こは、結婚して間もなく、父藤原倫寧が陸奥守となって奥州へ赴任するのを見送る悲しみを述べた条である。

物忌み 凶兆や異変のある時、不浄に触

(a) 思ひあらば干なまし物をいかでかは返す衣のたれも濡るらむ  
 とあるほどに、わが頼もしき人、陸奥国へ出で立ちぬ。時はいとあはれなるほどなり。  
 (b) 人はまだ見慣るといふべきほどにもあらず。見ゆるごと<sup>(c)</sup>にたださしぐめるにのみあり。  
 (d) いと心細く悲しきこと、ものに似ず。見る人も、いとあはれに忘るまじきさまにのみ  
 語らふめれど、人の心はそれに従ふべきかはと思へば、ただひとへに悲しう心細きこ  
 とをのみ思ふ。

今はとてみな出で立つ日になりて、行く人もせきあへぬまであり、とまる人、はた  
 まいていふかたなく悲しきに、「時たがひぬる」といふまでも、え出でやらす。また  
 ここなる硯に文をおし巻きてうち入れて、またほろほろとうち泣きて出でぬ。しばし  
 は見む心もなし。みな出ではてぬるに、ためらひて、よりて何事ぞと見れば、

君をのみ頼む旅なる心には行く末遠く思ほゆるかな

とぞある。見るべき人見よとなめりときへ思ふに、いみじう悲しうて、ありつるやう  
 に置きて、とばかりあるほどにものしためり。目も見合はせず思ひ入りてあれば、  
 「なか。世の常のことにこそあれ、いとかうしもあるは、われを頼まぬめり」な  
 どもあへしらひ、硯なる文を見つけて、「あはれ」と言ひて、門出のところにて、  
 われをのみ頼むといへば行く末の松の契りも来てこそは見め  
 となむ。かくて日のふるままに、旅の空を思ひやるだにいとあはれなるに、人の心も

れた時、また夢見の悪い時などに、一  
 日ないし数日間家にこもって慎むこ  
 と。  
 返す衣 着物を裏返して寝ると、恋しい  
 人の夢が見られる、という俗信があっ  
 た。

あへしらひ 応待する、(調子を合わせ  
 て) 相手をする、などの意。

【重要語句】 ○物忌み ○心もとなし  
 ○あはれなり ○さしぐむ ○ひとへ  
 に ○……あへず ○いふかたなし  
 ○え……す ○ためらふ ○頼む  
 ○思ほゆ ○なめり ○さへ ○いみ  
 じ ○とばかり ○ものす ○あへし  
 らふ ○ふ(る)

いと頼もしげには見えずなむありける。

《研究 A》

問一 傍線(イ)・(ロ)の「人」は、それぞれ具体的に誰のことを  
 さしているか。次の中から該当するものを選べ。

ア 作者(道綱母) イ 作者の父(藤原倫寧)

ウ 作者の夫(藤原兼家) エ その他別の人

問二 傍線部(b)の「人の心はそれに従ふべきかは」の内容と  
 して、最も適当なものを次の中から選べ。

ア 一般に人の心は言葉と矛盾するものだ。

イ 私はそんな言葉にはついてゆけない。

ウ 人(男)の心はあてにならないものだ。

エ 私はとてもそんな気持ちにはなれない。

問三 傍線部(c)の動詞「ためらふ」は、「つゝのる病勢や高ぶ  
 る感情などを押さえる意。転じて、行動に突き進むことを  
 ひかえ、逡巡する意」である。傍線部(d)の「ためらふ」に、  
 文脈上ふさわしいと思われるものを、次の中から選べ。

ア 遠慮する

イ 気を取り直す

ウ 病気を押さえる

エ 行きつもどりつする

問四 「君をのみ」の和歌は誰が誰に宛てたものか。問一に  
 あげたア～エの記号で答えよ。

問五 この文の作者は、父の愛情を深く感じとっている。そ

のことが最もはっきり表現されているところはどこか。原  
 文から抜き出して示せ。

問六 「思ひあらば」の歌の傍線(a)の部分に留意して  
 現代語訳せよ。

《研究 B》

問七 傍線部(1)・(2)のことは、どういう意味を述べているか。

問八 「ものす」は、「動作を直接さす語を用いず、一般的  
 な動作として把握し表現することに使う語」である。傍線  
 部(d)の「ものし」は、具体的には、誰が、どうしたとい  
 うのか。簡明に書け。

問九 傍線部(f)「あはれ」の説明として、最も適当なものを  
 次の中から選べ。

ア 「あはれ」は、陸奥国へ赴任する人と行を共にできず、  
 京に残らねばならなかった作者に対する、兼家の深い  
 たわりの念の込められた言葉である。

イ 「あはれ」は、倫寧の歌および発問際のおわただし  
 い中で、硯箱の中に手紙を入れておいた風流に対する、  
 兼家の感動のあらわれである。

ウ 「あはれ」は、京を離れて遠く陸奥国へ赴任して行か  
 ねばならぬ人に対する深い同情と、硯箱に手紙を入れて

おいた風流に対する称讃とを込めた、作者の言葉である。  
エ 「あはれ」は、新婚間もない夫兼家を、まだ心から信頼  
することができないでいる自分に対して、嘆かわしく思う

作者の気持ちがあらわれている。  
問十 傍線部(e)を、文脈に注意し、主語などを補って現代語  
に訳せ。

## 二 二十五・六日のほどに

二十五・六日のほどに、西の宮(1)の左大臣(2)流され給ふ。見たてまつらむとて、天の下  
ゆすりて、西の宮へ、人走りまどふ。いとみじきことかなと聞くほどに、人にも見  
え給はで、逃げ出で給ひにけり。愛宕(3)になむ、清水(4)に、などゆすりて、つひに尋ね出  
でて、流したてまつると聞くに、あいなしと思ふまでいみじう悲しく、心もとなき身  
だに、かく思ひ知りたる人は、袖を濡らさぬといふたぐひなし。あまたの御子どもも、  
あやしき国々の空になりつつ、ゆくへも知らず、ちりぢり別れ給ふ、あるは、御髪お  
ろしなど、すべて言へばおろかにいみじ。大臣も法師になり給ひにけれど、しひて帥(5)  
になしたてまつりて、追ひ下(6)したてまつる。そのころほひ、ただこのことにて過ぎぬ。  
身の上のみする日記には、入るまじきことなれども、悲しと思ひ入りしもたれなら  
ねば、記しておくなり。

【解説】「蜻蛉日記」安和二年(992)三  
月の記事。藤原氏の他氏排斥の謀略によ  
り、時の左大臣源高明が無実の罪をきせ  
られて、大宰権帥に落とされた事件。こ  
れを安和の変という。  
西の宮の左大臣 醍醐天皇の皇子、源高  
明。「西の宮」は彼の邸のあった所。  
愛宕・清水 いずれも京の周辺の土地。  
帥 大宰府は西海道九国三道を総督する  
役所で、筑前国三笠郡にあった。帥は  
その長官。親王が任ぜられるのが例で、  
都督ともいう。権帥をただ帥とも大武  
ともいい、大臣が罪を得るとこの位置  
につく。  
【重要語句】○ゆする ○まどふ ○い  
みじ ○あいなし ○心もとなし  
○あやし ○御髪おろし ○おろかな  
り ○帥

### 《研究 A》

- 問一 傍線部(1)～(3)の語句を口語に訳せ。  
問二 傍線部(4)の「すべて言へばおろかにいみじ」の口訳と  
して適当なものを、次の中から選べ。  
ア 何もかも口に出して言うと、ますます意味がわからな  
くなる。  
イ 何もかも口に出して言えないほど、大そう痛ましい。  
ウ すべてを言うとは、あまりにも愚かしいことである。  
エ すべてを口に出すので、悲しみが消えてしまう。  
問三 この西宮左大臣と同じく、大宰府に流された人がこの  
時以前にいる。その人の姓名を漢字で記せ。  
問四 筆者は、自分の日記は本来どういうことを書くものだ  
と思っっているか。  
《研究 B》  
問五 傍線部(a)「心もとなき身だに」とあるが、なぜ「心も  
となき」なのか、その理由を次の中から選べ。  
ア すっかりあわてて、気が変になっているから。  
イ 事件の実情を知りたいが、よくわからないから。

- ウ 自分も左大臣のようなめに会いはしないかと心配にな  
るから。  
エ このような騒ぎのときに、相談相手になってくれる人  
がいないから。  
問六 傍線部(b)「しひて帥になしたてまつりて」とあるが、  
筆者はなぜ「しひて」ということばを使ったのか、その理  
由を三十文字以内で記せ。  
問七 筆者は、自分の日記に、なぜ左大臣の事件を記したの  
か、その理由を次の中から選べ。  
ア 誰の日記にもこういう悲しい事件は記録すべきものだ  
から。  
イ ほかならぬ左大臣さまが悲しい思いをされた事件だけ  
ら。  
ウ 誰もが当然おこるべき事件だとして心から悲しまない  
から。  
エ この事件が筆者自身の心に深い悲しみの衝撃を与えた  
から。